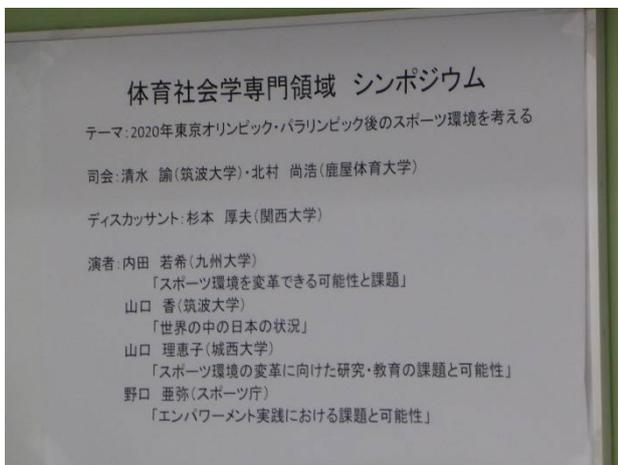


日本体育学会第 67 回大会
体育社会学専門領域シンポジウム

2020 年東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境を考える

シンポジスト：内田若希（九州大学）
山口香（筑波大学）
山口理恵子（城西大学）
野口亜弥（スポーツ庁）

ディスカッサント：杉本厚夫（関西大学）
司 会：清水諭（筑波大学）・
北村尚浩（鹿屋体育大学）



日時：2016 年 8 月 25 日（木）9：00～12：00
会場：大阪体育大学 P501
主催：日本体育学会体育社会学専門領域

【清水】 本日は、お集まりいただき、ありがとうございます。体育社会学領域のシンポジウムは、「2020年東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境を考える」というテーマで障害者や女性がスポーツを行う際にどのような課題と可能性があるのかについて、議論したいと思います。

今現在、グローバル化の中で、さまざまな問題が世界的に起こっていることは確かです。ここ（スライド）に挙げているような事例は、ニュースそのほかでよく知られています。テロ対策、ヘイトスピーチ、女性の社会進出、性的マイノリティー（LGBT）の権利、移民・難民の受け入れ、外国語教育、歴史認識、イルカ漁やクジラ漁も大きな問題になっています。また、ハラル認証など、さまざまな課題への対応が急務な状況です。

一方で、4年後、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックを控えて、「おもてなし」そのほかの日本文化が「ソフトパワー」という名のもとに、世界で熱い視線を受ける状況が起きています。世界遺産登録、和食の無形文化遺産登録、また、海外からの観光客のインバウンドが目立ってきて、「ビジット・ジャパン事業」、「クールジャパン機構」、そして海外への広報拠点となる「ジャパン・ハウス」を造ろうという試みがあります。

そういう状況の中で、ここにおられる皆さんも、ジェンダーや障害者というテーマは、本当に身近な経験から議論されていると思いますが、この学会で理論と実践を踏まえたイシューとして採り上げ、考え、行動していこうとする一つの契機になればと思います。

今回のリオデジャネイロ・オリンピックでも、女性選手に対する「ちゃん」付け、あるいは卓球の団体戦においても、「三人娘」と名付けられていたような「娘化・妹化」がなされています。また、「セレ女」や「カープ女子」のように、女性を一括りにしたスポーツファンやサポーターの捉え方がなされ、スポーツの戦術や技術に対する知識よりもスタジアムでのお土産や弁当ほか、「ミーハーな観戦者」として捉えられてしまう傾向があるように思います。また、いつも同じようなかたちで問題にされますが、肌の露出や特定のカメラアングル、すなわち男性のカメラマンのまなざしによって、ある特徴をもった映像や画像が配信され続け、「女神」、「抜群のプロポーション」、「女子力」という形容のされ方が、女性アスリートに対して、ずっと続けられています。

一方、オリンピックあるいは「なでしこ」のサッカー選手たちや、パラリンピックの一部は、女性が用いる商品、すなわち化粧品、シャンプー、コンディショナー、洗剤、食品、お菓子類のコマーシャルに出てくる可能性が非常に高いのも「女性らしさ」と親密な関係を想像させるものだと思います。

さらに、アスリートのインタビューであれば、2011年になでしこジャパンが優勝して帰ってきた際も、「おしゃれ番長、誰ですか」、「彼氏はいますか」、「旦那さんは何て言っていますか」というような、女性の役割に特化するインタビューのされ方がまん延し、消費社会の中で、オリンピック、パラリンピックを含めた女性アスリートが「一般的な女性性」に見合ったかたちで消費されていく状況があります。ここにはやはり、古典的な「男らしさ」／「女らしさ」の社会的性役割を基盤にした男性目線による「女性」の捉えられ方があるということが分かります。

スポーツが持っているもともとのイデオロギーが、「より速く、より高く、より強く」にあって、こう

したイデオロギーを基にした強さやたくましさについて、あえて考える以前に、自然に無批判のうちに、普及・浸透し、ある極限化・卓越化の中でこのイデオロギーが絶対視されてしまう。そういう中で、女性アスリートにとって、ギャップ的な意味合いが込められているのかは分かりませんが、社会の中で「女らしさ」を強調する一つのツールになってしまっているようにも思います。

そこには、当然ながら、ジェンダーだけではなくヘテロセクシュアリズム、男性と女性の異性愛主義を前提とした中で、「男性性（マスキュリティ）」の構築、すなわち強さやたくましさを強調する報道のされ方、映像の作られ方がなされていると思います。したがって、イギリスで生まれた場合にはラグビーやサッカーがそうですが、同性の社会（ホモソサエティー：男性のみの集団）としてのスポーツ集団が描かれたりもしますが、そこでは、「俺とおまえ」の関係においても、ヘテロセクシュアリズムを確固とした前提として、その上に、同性愛嫌悪（ホモフォビア）が歴史的に成立してきました。汚い言葉ですが、「このオカマ野郎」、「女々しい奴だ」という言い方がなされるのは、こうしたジェンダーとセクシュアリティの相乗りの上で、「強さ」や「たくましさ」の表現を誰のどのような行為に用いるのかを決めているわけです。

したがって、「LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）」と言われるセクシュアルマイノリティーのポジションが、この間もソチ冬季オリンピック・パラリンピックでも話題になりましたが、差別されていく、一つの排除（エクスクルージョン）の対象になってしまう理由を与えてしまうわけです。スポーツは、こうした状況を生み出す特徴を持っていると、私たちも気付いてきています。

一方、2012年のロンドンオリンピックにおける日本の柔道が取り上げられましたが、ハラスメントや暴力の問題、そして1964年東京オリンピックの女子バレーボールに端を発するかのような男性監督と女性アスリートにおける支配／服従といった上下関係の構築が、延々繰り返されています。しかし、女性アスリートの年齢がどんどん上がって、もちろん結婚もするし、出産して子どもも育てながら現役を継続する状況が生まれる中であって、それらに対する支援のほか、女性が組織のディレクター、理事、コーチ、そして監督になることが非常に少ない状況は相変わらずです。

さて、ここで世界に目を転じると、国連による「ミレニアム開発目標」（2001）とその後の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」（2015）が提示されています。これ（スライド）は2030年までに達成すべき17課題ですが、ジェンダー平等を実現しようという課題があります。このように、世界の中では、ごく自然に、どの状況においても女性について考え、平等そして共に考えていくということが、どんどん進んでいます。

ようやく2015年に女性活躍推進法（女性の職業生活における活躍の推進に関する法律）が成立し、指導的な地位を占める女性の割合が、「2030（ニイマルサンマル）」、2020年までに30%にしようということが、今の政権では言われています。しかし、実際の女性の管理職比率は11%台で、世界の中では大きく取り残されている現状です。アジアの中でも、シンガポール、マレーシア、タイの女性指導者の多さに比べると、問題が山積みのままではないかと思えます。

今日のシンポジウムについて、資料となるのは、以下になります。

- ・渡辺靖著『文化を捉え直す：カルチュラル・セキュリティの発想』（岩波書店）
- ・『現代スポーツ評論』では、特集として「障害者スポーツをどのように考えるか」（第29号）、「スポーツを通じた国際貢献のいま」（第31号）、「女性スポーツの現在」（第33号）（以上、創文企画）をとりあげています。
- ・日本スポーツとジェンダー学会編『データでみるスポーツとジェンダー』（八千代出版）は、非常に細かいデータがたくさん出ています。こうした著作も参考にしながら、議論を続けていくきっかけになればと思っています。

本日のシンポジストを紹介します。内田若希さん、九州大学。山口香さん、筑波大学。野口亜弥さん、スポーツ庁国際課。山口理恵子さん、城西大学。ディスカッサントには、杉本厚夫さん、関西大学。そして、私と司会進行を務める北村尚浩さん、鹿屋体育大学です。私は、筑波大学の清水諭です。よろしくお願いします。

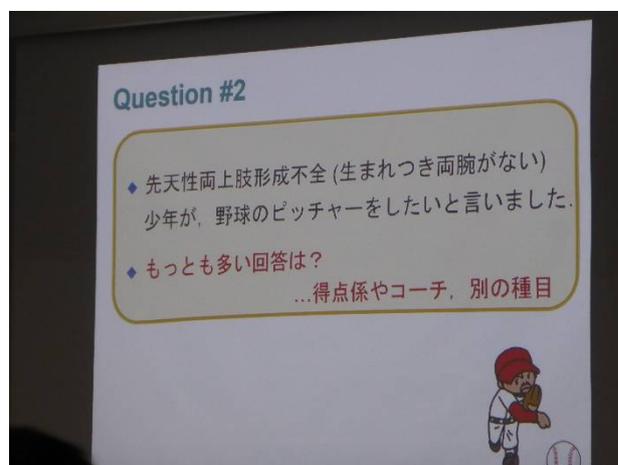
シンポジストには、30分ずつ話をしてもらいます。お二人、内田さん、山口さんが話されたあと、5分ほど休憩を取ります。そのあとは最後までいきたいと思います。そして、4人の発表のあと、杉本さんからディスカッサントとして、15分ほど話をしてもらおう予定です。それでは、内田さん、よろしくお願いします。

「スポーツ環境を変革できる可能性と課題」

内田 若希（九州大学）

九州大学の内田です。普段は体育心理学やアダプテッドスポーツの専門領域をベースとしています。私は、ほぼ20年、ボランティアやスポーツ指導員として、今は心理サポートのスタッフとして、障害者スポーツの現場に関わっています。今日は、自分自身の経験の中で、ずっと考えていることを踏まえながら、東京2020まで、そして、そのあとに何を残していかなければいけないのかを考えていきます。

本日のトピックは、現在のパラアスリート、いわゆる障害があるアスリートを取り巻く環境について、国内外の状況を簡単に説明し、そのあと、「スポーツ環境の変革」がテーマになっているので、「共生社会の成熟」をキーワードに話をします。



初めに、パラアスリートを取り巻く環境について話します。障害者スポーツは、もともとはリハビリテーションからスタートしていますが、1998年の長野パラリンピックを契機にして、日本もかなり変わってきました。

世界的に見ると、競技スポーツとしてかなり成熟していて、今は、オリンピックと同じように、定められた標準記録を突破したり、世界ランキングの上位にランクインし続けないと、パラリンピックには参加できないようになってきました。この標準記録も年々高くなっています。これを受けて、特に北京からロンドンの大会の間から、障害があるトップアスリート専用施設や、オリンピック選手との共用が可能な施設を有する国が増えてきて、競技力向上に力を入れているのが現状です。

その最先端はイギリスです。イギリスのラフバラー大学にかなり充実した施設がそろっていて、世界中の障害者スポーツ研究者が注目しています。これは、British Athletics とラフバラー大学が共同出資をして、High Performance Athletic Centre (HIPAC) という施設を設置しています。ここは、基本は、オリンピックやパラリンピックに出るような選手や、強化指定に入っているようなエリートアスリートだけが利用できる施設です。

3階建てになっていて、あの中に、医科学、フィジカルなどのブースが入っています。右上は、下がり

カバリープールになっていて、温水と冷水の二つのプールがあり、障害がある人も使えるようにリフトが設置されています。左下はトレーニングルームです。重心を測るフォースプレートも、車いすのまま乗れるように設置してあります。シルバーの部分がプレートです。

もう一つ、障害のあるアスリートだけのためのセンターも、ラフバラ大学の中にあります。それが、Peter Harrison Centre for Disability Sport (PHC) という施設です。ここは、障害のある選手をサポートする医科学の研究所の拠点で、かつ、パラリンピックの選手を連れてきて、ここでトレーニングをして強化を図っています。

左上は、有酸素能力などを図るモニターにつながっていますが、左下も、競技用車いすのまま乗ることができるトレッドミルが置いてあります。日本でも和歌山にありますが、かなり大きなトレッドミルが設置されています。

日本は、1998年の長野パラリンピックを契機として、それまでは福祉の要素が割と強かったのですが、プロとして活躍をするアスリートや、競技志向の高いアスリートが増加してきたきっかけは長野だったと言われています。

2020年、東京パラリンピックの開催が決定したことや、スポーツ庁の発足によって、パラリンピックとオリンピックの管轄が一本化されたことによって、今後、競技スポーツという視点がますます強くなっていくと考えられます。

また、障害者雇用の法定雇用率について、現在、企業が50人以上従業員を雇っている場合は、全従業員の2%の障害者を採用しなければいけない法律があります。その2%の部分に、障害があるアスリートをアスリートとして採用し、それによって企業貢献、自分たちにもメリットがあるという観点から、アスリート雇用が増加しています。

こういうことから、今、パラアスリートを取り巻く環境は過渡期にあります。その中で、現場に出ていると、さまざまな問題が見えてきます。その辺りのことを話します。

今日、私が一番話したい問題です。障害のある人たちのスポーツ環境を変えるのは、恐らく、障害のある人たちのためだけではありません。「共生社会」と簡単に言いますが、本当にどのぐらい理解されているかということが、実は大事です。

「しょうがいしゃ」を漢字で書くとき、皆さんはこの三つのどれを使いますか。この三つ（「1. 障害者」「2. 障害者」「3. 障がい者」）は全部「しょうがいしゃ」と読みます。「1」は居ないと思います。「2」か「3」がほぼ全員だと思います。これらの漢字の意味には、それぞれ違いがあります。「しょうがい」にどういう字を使うかという論争はずっと続いていて、いまだに決着していません。

実は、英語で「障害者」をどう説明するかも、いまだに論争があります。例えば、「Individual with disability」と言うのか、「with impairment」と言うのか、「Disabled person」と言うのかと、非常にもめます。

日本語の漢字だと、「1」の「障害」の「碍」は、もともとは、何かを行うときに差し支えるという意味です。町中に出ていったときに、車いすだと段差があると進むことができないというように、何かを行うときに行動に差し支えがあるという意味があります。

ところが、「碍」が常用漢字から外れたために、使わないことになりました。そのときに、似たような意味、似たような響きの「害」を充てたのが最初です。この「害」は、「ものごとの妨げとなる」、「危害を与える」という意味なので、「障害者」と書いたときに、その人たちが社会の中で障害となる人と取れてしまいます。これが論争を引き起こした原因です。障害がある人は、社会にとっては害になる人だと取れてしまいます。だったら「害」は良くないということで、最近では、平仮名にして否定的なマイナスイメージを緩和しようという動きがありました。私も、どれがいいという答えはありません。

ところが、福岡市でも10年ほど前に、「害」ではなく、平仮名で表記をすると変わりました。当時、私は、福岡市障がい者スポーツセンターで指導員をしていましたが、そのときに初めて、平仮名に変わった直後の水泳大会があって、看板が、「障がい者水泳大会」と平仮名に変わりました。

そのときに、そこでちょうど水泳の練習をしていた当事者が、「当事者を置き去りにした議論に何の意味があるんだ。みんなが過剰に反応して違う部分にばかり目を向けて、『害する』は、自分たちが危害を加える人間だみたいに扱おうとするから、差別だ何だとなるけれども、自分自身は何とも思っていない。何を使ってくれても構わない。俺から言わせれば、結局、そういうことを言い争っていること自体、差別なんだけどね」と言っていました。

そのときに、私も、当時まだ大学院生だったので、「しょうがい」はどんな字を使うのがいいのか、結構悩んでいたこともありましたが、はっとさせられる一言でした。

2010年、西日本新聞に、そもそも社会参加を妨げる障壁とは何かを考えていくことが、障碍というものを考えることにつながると示唆した記事が載っていました。障碍者というと、体にある脊髄損傷や、切断して足がないなど、その人が持っている障碍に目を向けます。しかし、実はそうではなくて、社会の中に存在している障壁、障害によって被害を受けている存在で、社会の中にある障害こそが障害であるという視点です。だから、変わるべきは、障碍者が障碍を持っていると思って論争している私たちのほうで、実は、彼らを何か変えようとするものではありません。

このことを考えるうえで、もう一つ質問です。先天性両上肢形成不全は、生まれつき肩から先、両腕がありません。それ以外には障碍がありません。この先天性両上肢形成不全の少年が、「先生、僕、野球のピッチャーしたいんだよね。だって、お友達みんなやってるし、僕もやりたい」と言ったとします。皆さんは何と回答しますか。

いろいろな答えがあります。学生やさまざまなスポーツ指導員の研修会で質問すると、最も多い回答は、「うーん、そんな言っても、腕がないからピッチャーできないよね。じゃあ、得点係やったりとか、3塁コーチャーやったらいいんじゃない?」とか、「足が大丈夫だから、サッカーのほうがいいんじゃない?」って言いますかね」という回答です。

ところが、この回答の本質は、「だって、障碍があるから、腕がないから、ピッチャーはできないよね」ということです。そう見てしまうと、私たちが、彼らは野球ができないという障害を生み出して、彼らの可能性を奪い取っています。

その視点をどう考えてほしいかという、WHOが1980年に、障碍を捉える三つの視点、分類を出し

ています。三つは、機能・形態障害、能力障害、社会的不利です。機能・形態障害は、いわゆる障害です。つまり、脊髄損傷、四肢切断、視覚障害、脳性まひ、内部障害、発達障害などです。能力障害は、機能・形態障害に基づいて、何かができないという発想に基づくものです。例えば、脊髄損傷があって、車いすに乗ることになりました。「脊髄損傷があるから、歩くことができない」、「視覚障害があるから、見ることができない」、これが能力障害です。

社会的不利は、「ハンディキャップ」という英語が充てられています。日本人は、障害がある人を「ハンディキャップのある人」と使います。「ハンディキャップ」を何となくいいイメージで使っていると思いますが、実は、非常に良くないイメージです。「ハンディキャップがある人」は二度と使わないでください。

社会的不利を指すハンディキャップとは、バリアや差別など、社会の中で生じる個人の問題を指しています。つまり、機能・形態障害で脊髄損傷を負いました。だから、歩くことができなくなったという能力障害を負いました。そして、町の中に出ていったら、段差があって階段しかなくて、2階に上がることができません。2階に行けない、社会に参加することができませんが、それは、あなたに障害があるから仕方がないという発想が、社会的不利です。障害があるから仕方がない、障害があるのが悪いという発想に基づいています。

視覚障害がある、機能・形態障害です。だから見ることができない、能力障害です。この人は見ることができないから、仕事はそんなにできないのではないかという偏見を受けてしまいます。でも、それは障害があるから仕方がないというのが社会的不利です。

そうすると、障害のある人が悪いというところに戻ってしまいます。そうではないというノーマライゼーションの考え方が世界的に浸透してきてから、非常に変わってきました。WHOも、この視点ではなく、このままでは良くないということで、2001年に、障害ではなく生活機能を捉えていくことが肝要だと、視点を切り替えています。つまり、DisabilityではなくAbilityを見ていくことが大事だと、発想が変わります。

生活機能を捉える三つの視点に立つと、「機能・形態障害」という言い方ではなく、「心身機能・構造」と変わりました。障害があるかないかで見ているときは、障害を持っていなければ関係のない話でしたが、「心身機能・構造」では、心身機能なので、障害はあるかもしれない、病気はあるかもしれない、何かあるかもしれませんが、その人にはどんな能力、残存機能があるかというふうに、発想が変わりました。

例えば、私は椎間板ヘルニアを持っています。さっきまでの障害で見ると私は関係ありませんが、これでいくと、私は椎間板ヘルニアで腰に負担を掛けないほうがいいけれども、そのほかに残っている機能はどうかといったような、全員に関わる発想に切り替わりました。

そして、「能力障害」ではなくて、その心身機能をもってこの人は何ができるかという「活動」の視点に変わりました。だから、脊髄損傷を負って歩けないけれども、両腕が残っていて、車いすに乗れば町中を移動することができます。これが「活動」です。この「できる」のほうに目を向けます。

そして、「社会的不利」ではなく「参加」です。社会の問題は何か、社会の中の障害は何かを見ていくという視点に変わりました。なので、脊髄損傷を負った、車いすに乗れば町中に移動することができる。でも、段差があって2階に行くことができないのであれば、そこにエレベーターのない社会のほうが問題である。その人の参加を妨げている環境こそが問題であり、「障害者は大して役に立たない、だから、仕事で雇ってもね」という偏見がある社会に問題があるという視点に切り替わりました。

アスリート雇用の話は、良さそうに見えます。トップアスリートからすれば、スポーツに没頭できるし、一般企業からすれば、「うちは障害者のアスリートを雇っているんですよ」と、何となくブランドイメージが良くなります。

でも、実は、私は面と向かって聞いたことがあります。「障害者を雇っても使いものにならないから、大して役に立たないから、アスリートで雇っておいたらうちにもメリットがあるし、彼にもメリットがあるし、いいんじゃない？」と言った企業の人が、実際に居ました。

でも、それこそが、実は、社会的不利を生み出しています。そうではなくて、一緒に社会の問題を考えていこうという視点こそが大事です。つまり、Disabilityではなくてアビリティ、能力に目を向けて、それを生かすために私たちはどうしていくのかを考えていく必要があります。

そういう話をもって、先ほどの質問に戻ります。両腕のない少年が、「野球のピッチャーをしたい」と言いました。これは作り話ではなく、私が最も尊敬している障害者スポーツ指導員から教えてもらった実話です。いろいろな答えがあつていいと思いますが、野球のピッチャーをやりたいという可能性を奪わないでください。

そのときの対応は、足の甲にボールを乗せて蹴り出したら前に飛びます。練習すればかなりうまくなります。マウンドからの距離が遠いので、そのときは縮めました。そういう配慮は必要です。でも、彼は、「ありがとう、先生。僕、ピッチャーできてすごいうれしい。ほんとにありがとう」と感謝しました。彼にとっては間違いなく野球でした。これを野球ではないと言う人は居るかもしれませんが、でも、そこを野球だと喜んだ、それを生み出したということは、非常に大事にしていきたい部分です。

できないということに目を向けてしまうと問題になるのは、社会の中に、無意識的であれ、意識的であれ、心のバリアを生み出していくことです。四つのバリアです。「バリアフリー」が市民権を得て久しいですが、四つのバリアは、物理的バリア、制度のバリア、情報のバリア、心のバリアを指します。

物理的バリアは、段差があるなど、いわゆる建築物や環境です。制度のバリアは、障害があると取れない資格があるということです。視覚障害があると医師免許が取れないということです。情報のバリアは、震災があると必ずニュースになりますが、震災のときに必要な情報がラジオなどで流れても、聴覚障害のある人だと、アクセスが遅れてしまって被害が大きくなります。心のバリアは、人の意識や態度、偏見を指します。

私たちスポーツに関わる人間が取り除けるのは、間違いなく四つ目の心のバリアです。私たちは建築士でもないし、法律家でもないので法律を変えるのも難しいです。であれば、今日からでも、今すぐにも取り組めることが、心のバリアです。

心のバリアというと、自分は障害者に偏見はないし、心のバリアはないと思う人も多いですが、それを問い直す意味で、もう一つ質問します。障害のない人を「○」で表すなら、皆さんは障害のある人をどんな記号で表しますか。

多い答えはこれ(○の一部が欠けている形)です。何となく欠けている。障害があるから、不利益もあるし、いろいろ困ったことがあると、1カ所切ったものです。次に多いのが「◎」です。何となくいいような感じにしてみたかったという心の動きらしいですが、心のバリアで葛藤したと思います。障害者に偏見を持ってはいけない、欠けるのは上から見た感じになるから、1個増やして良さげな感じにしておこうと、「◎」になります。女子学生に非常に多いのはこれです。中にハートを入れています。「◎」よりもさらに優しい感じですよ。

私が思う答えは、障害のない人が「○」なら、障害のある人も「○」です。違いに目を向けてしまうと、違う記号を描こうとします。つまり、私は、わざと障害のない人と障害のある人と書きましたが、障害のない人も、障害のある人も、人であることは同じです。人であることに目を向けると、記号は多分「○」になります。でも、障害がある、障害のないという違いに目を向けると、違う記号になります。実は、ここが共生社会を考えるうえで問題になってくる部分です。

皆さんに新聞記事をもう1枚配っています。これは、ロンドンパラリンピックのときの「ロンドン大会が目指したもの」という記事です。確かに、ロンドン大会は、お金も付いたし、先ほどのイギリスの施設もあって、選手強化も非常にうまくいきました。しかし、実はロンドン大会は、メダルラッシュだけを目指したわけではなくて、人々の意識や社会の変革にこそ意味があると。

そして、パラリンピックを契機にそれをやるというと、障害がある人のためにやると取られますが、実はそうではありません。例えば、段差をなくせば、障害のある人だけではなくて、ベビーカーを押す母親の役にも立ち、便利になります。実は、障害のある人にやるということではなく、配慮の必要な人に配慮をするということは、全ての人に共通です。ロンドン大会は、それを目指したということに、非常に意義がありました。

「障害のあるアスリート」という言い方をしますが、なぜ「障害のある」という形容詞が必要なのか、なぜ「アスリートが」ではいけないのか。ロンドン大会のときは、「障害のあるアスリート」ではなくて、アスリートとしての姿を映し出して、同じ人である、同じアスリートであるという可能性を示そうとした大会でした。そのために、イギリスのテレビ局、チャンネル4が作成した「ミート・ザ・スーパーヒーローマン」という予告編動画が話題を呼びました。

(動画再生)

この映像は、リオ大会に向けても一番新しいものが出ています。非常に格好いい仕上がりになっています。これが功を奏したのか分かりませんが、ロンドン大会のとき、ロンドンでは、テレビでもずっとパラリンピックの放送がありました。

競技がないときは、合間に町中にアナウンサーが出て、子どもたちなどにインタビューをしています。そのとき、子どもに、「君は、障害を負ったら何の競技がやりたい？」と聞きます。日本ではやらないと

思います。「僕は、義足が格好いいから義足の選手がいいな」と子どもが答えます。そんな差別的なことを聞くのかと思うかもしれませんが、私はあまり思いません。私も、障害があったらこの競技をやりたいと、たまに考えるので、それが当たり前でいいと思います。

では、東京オリ・パラに向けて考えるときに、私だけではなく障害者スポーツに関わっている人たちと、昨日も、藤田先生（日本福祉大学）のシンポジウムもあったし、あのあと、藤田先生とも少し話をしましたが、やはり、社会変革、意識を変革していかないと変わっていかないと、これを残さなければいけないと思っています。

私たちは、どうしても違いを見てしまって、同じであることを忘れがちですが、同じであることを先に見なければいけません。今回の大会に「融合」というテーマが付いていますが、融合は、違いを先に見ます。違うけれど一緒にしたほうがいいという発想です。

しかし、そもそも人であることは同じであるうえで、違いがあります。その違いがあるときに配慮が必要なら配慮をします。だから、例えば、オリンピックとパラリンピックを一緒にするという発想もあると思いますが、人であることは同じだという意識を持っておけば、そのうえで違いを認めていくということが生まれます。

今、「パラリンピック教育」という言葉があって、いろいろな学校で採り入れていますが、教育場面にも採り入れていかなければいけません。そして、私たちスポーツ、体育などに関わる人たちも考えていかなければいけません。

障害ではなく、能力、その人の可能性を見つめる意識を常に持ってほしいです。さっきの野球の少年の話もそうです。そこで、「野球はできないんだよ」と言ってしまうことのほうが、真の障害を生み出していくと思っています。なので、パラリンピックに向けて、その意識、私たち指導員、指導者を含めて変えていかなければいけないし、残していかなければいけません。ご清聴ありがとうございました。

【清水】 内田さん、どうもありがとうございました。私たちが「障がい」ということの表象をどのように捉えるかという課題がありますが、そのことを具体的に授業のように考えながら、「できないこと」ではなく、「できること」、能力というところから、私たちが捉えていくこと。同じ人間であるということをも基盤にしながら、どのようにこうした考え方に変えていけるのかということをも、具体的に示してもらいました。

それでは、次の山口さんには、柔道の実践の現場でこの4年間やってきたことなどを踏まえながら話していただければと思います。それでは、山口さん、お願いします。

「世界の中の日本の状況」

山口 香（筑波大学）

筑波大学の山口です。私に与えられたテーマは、「世界の中の日本の現状」という非常に漠然としたテーマです。私はアスリート出身なので、メダル戦略や競技力向上にも興味があるし、関わっているので、その辺りから少し話をします。

メダルラッシュに湧いたリオデジャネイロ・オリンピックの4年前、ロンドンオリンピックで、日本が取ったメダルは、このような結果になっています。各国のメダル獲得数と順位は、まず、金メダルの数で決まります。金メダルが同数だと銀メダル、そして銅メダルとなっていきます。ですから、メダル獲得数ではハンガリーの17個などを超えています。金メダルの数で、前回大会は11位という結果になりました。

リオデジャネイロ・オリンピックでは躍進しました。これで、2020年に向けてメダル獲得への期待がさらに大きく高まって、その期待にどう応えていくかは、本当に大きな宿題です。金メダル数が7個から12個に増えたことがあって、ロンドンの11位から6位という順位になりました。メダル総数でも、前回大会の38個も過去最多でしたが、それをさらに上回って、41個のメダルを獲得しました。昨日、団長を含めて選手団が帰ってきましたが、東京では80個を目指すと言われておられました。あと4年しかない中で、この目標がどのような結果になるかは注目していきたいし、考えなければいけないところです。

選手の内訳です。前回大会は、女性選手の出場選手数が男性を上回っていました。今回はほぼ同数です。男性が174人、女性が164人で10人の差があります。コーチ、スタッフが234人です。

しかし、ここで見なければいけないのは、男女の選手数はほぼ同数であるにもかかわらず、コーチ、スタッフの数で言うと、234名中、女性の監督、コーチが21名、トレーナー、総務等のスタッフが17名です。このスタッフも、マネジャーというか、総務担当コーチが意外と多いです。実際にはそうではないかもしれませんが、その辺りに、女性がチームの中で何を期待されているかということが見えてきます。

課題とすれば、女性の選手の数がこれだけ増えているので、女性のコーチ、スタッフの比率も同数とはいかなくても上がっていくのが自然だと考えます。

日本選手団の41個のメダルの内訳です。金メダル数は女性が若干上回り、銀メダルは男性が多く、メダル数でも男性が多かったです。これを見ても、メダル戦略を考えるときにも、男性と女性と同じように強化を行い、評価をしていく必要があるし、それだけの価値があることが分かります。

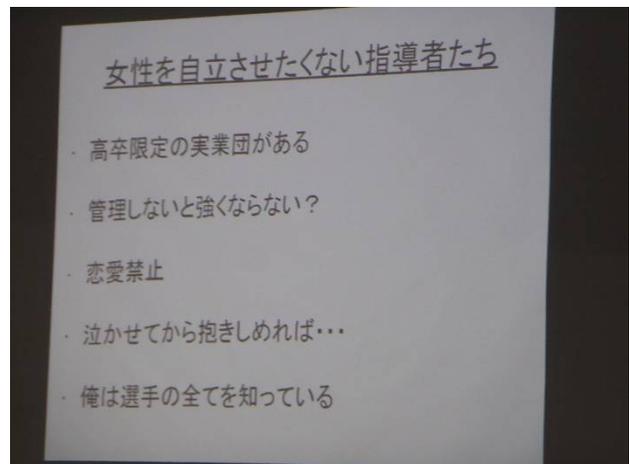
私は今回、直接強化に携わったわけではありませんが、メダルというところでリオオリンピックを総括すると見えてくることをまとめました。まず、注目すべきは、ロンドン大会では、26競技中13競技、約半分の競技でメダルを獲得することができました。これは非常に重要な視点です。柔道やレスリングはたくさん取っているイメージがあると思いますが、日本が今まで得意種目とされていた競技だけではないところで、幅広くメダルを取る可能性を示せたのがロンドン大会でした。

ところが今回は、競技数が 28 競技に増えたにもかかわらず、メダル獲得競技が 10 競技に減ったことが、一つ課題として残ったと考えています。メダル獲得競技が減少しているにもかかわらず、メダル数が増えたということは、1 競技で多数のメダルを獲得したことを意味します。

これは、どちらにも取れます。メダル戦略として上位に上がっていくためには、そういう競技を増やすことは定説です。しかし、幅広くメダル戦略をしていく中では、課題を残したと思っています。

メダル総数 41 個を見てみると、柔道が 12 個、レスリングが 7 個で、この二つの競技で半数を取っています。ただ、メダル倍増計画を考えると、柔道は全階級取っても 14 個しか取れません。レスリングも、これ以上取れというのは、ほかで何を取るのかという話になってくるので、この辺りが課題です。

もう一つは年齢です。男性選手の年齢幅は 19 歳から 32 歳です。女性選手が 15 歳から 33 歳でした。女性のほうが年齢幅が広く、一番年上が 33 歳でした。ここは、女性のアスリートを強化していくうえで、一つのポイントです。



以前は、水泳にしても、体操にしても、ピークが非常に早い段階にあって、身体能力や伸び代が十分発揮できる前に引退してしまったり、ドロップアウトしてしまったりする選手が、女性アスリートの中では比較的多かったです。女性は活躍の年齢が早かったのです。

しかし、今回の年齢構成を見ると、頭角を表してから技術を積み重ねていって、比較的長く活躍する選手が女性にも出てきたことは、一つの大きな変化だと思っています。でも、だからこそ、女性のキャリアを考えたサポートなど、さらなる態勢、システム作りが必要になってくるということも見えてきます。

もう一つは、メダル戦略で言うと、日本はやはり個人種目にメダルが多かったです。団体種目は、盛り上がりとしては非常にあります。ただ、個人種目と団体種目の合わせ技のような、卓球の女子団体、男子団体などを見ると、どちらに入れるのかよく分かりません。IOC も、人数制限があるので、最近では、個人で戦わせておいて、もう 1 回同じ選手を使い回して感動を持とうというような、「1 粒で二度おいしい」のようなやり方をします。柔道も、これから団体戦を入れたいという話もしています。日本は、団体種目と個人競技で非常に力を発揮していると言えます。

また、これはリオから東京に向けての大きなポイントですが、今回のメダル数は、ほぼ計算どおりです。期待した選手が活躍し、期待したメダル数を獲得することができたと言えます。

以前は、世界選手権等の国際大会では上位に居たにもかかわらず、取れなかった選手が多かったので、日本選手はプレッシャーに弱い、大舞台に弱いと言われていました。でも、今回の活躍を見ると、期待された競技や選手が、ほぼ実力どおりの力を発揮した結果、私たちがある程度予測していたメダル数に届いたと言えます。ただ、今後、東京に向けては、リオの比ではない、コーチ、スタッフも含めて誰も経験したことがないプレッシャーが掛かるので、期待された競技、選手が力を発揮できるかは未知数です。

2000年に策定されたスポーツ振興基本計画によるタレント発掘や競技者育成プログラムで、選手たちが若い段階から発掘されてきちんと育成された結果、オリンピックで活躍できていることが、リオで活躍した若手選手の状況から分かります。

そして、国立スポーツ科学センターの設立で、スポーツ医科学、支援、研究、診療の拠点ができました。女性選手も年齢が上がっていくと、長年の競技生活で消耗してくるので、疲労などでけがや故障なども多くなってきます。ベテランの活躍はそういう部分のサポートがうまくいった結果でもあります。また、ナショナルトレーニングセンターもできました。

選手強化事業の拠点ができたという観点と、もう一つは、チームジャパンという心の部分、親和性の醸成です。私たちがアスリートの時点は、オリンピックに行っても、テレビで見たことがある人が居た程度で、一応挨拶はしますが、他人と擦れ違うような感じでした。しかし今は、強化の選手たちは、ナショナルトレーニングセンターで常時、合宿をしているので、選手たち同士が非常に仲が良く、みんなで頑張るという意識が、コーチにも選手たちにも生まれたと思います。

また、今は「ハイパフォーマンス事業」と名前を変えています。マルチサポート事業は、ターゲット競技、種目に対して、包括的なメダル戦略ということで、トレーニング、コンディショニングなど、さまざまな支援をしてきました。

ただ、これまで行ってきた強化支援をこれからどうやっていくのかということも、課題がないとは言えません。こういうさまざま行ってきた事業は確実に成果を上げています。当然、強化費も増えています。これが、どこまで積み上げていけばこれ以上の結果が出るのか、お金をかけ、サポートを増やせば、40個が80個になるという単純なものではありません。正直、結構いっぱいいっぱいのところまで来ているので、このあと何を支援していくのか、どうやっていくのかは大きな課題です。

日本選手団のリオでの躍進の背景には、やはり女性の活躍も否めない部分です。女性のオリンピックをざっくり振り返ってみると、第1回のオリンピックには、女性は参加していません。1900年の2回大会から女性が参加し、997人中たった20人が、女性としては初めてオリンピックに参加しています。

女性の参加が促進されてきたのは、実は本当に最近のことで、1984年のロサンゼルスオリンピック辺りから、女性の競技参加が急速に進みました。女子マラソンは、日本も非常に活躍している競技ですが、実は、オリンピック種目に入ったのはロスからです。シンクロと新体操もロスから入りました。これらの種目は女性だけの競技です。

IOCは、これからは、男性だけ、女性だけの競技や種目ではなく、男女一緒にやれる競技でなければ入れないと、舵を切っています。その結果、男性だけの競技に女性がどんどん進出していきます。ソウ

ル大会で女子柔道が公開競技、バルセロナで正式種目、アトランタでサッカー、シドニーでウエートリフティング、アテネでレスリング、ロンドンでボクシングです。私が柔道をやり始めた頃は、「女だてらに」、「女のくせに」と言われた種目がどっと入ってきました。マッチョな男の人たちの格闘技と言われるものも、女性に道がどんどん開かれてきました。

また、注目すべきは、今回のリオ大会では、およそ保守的と言われる日本の女性が獲得したメダル 18 個のうち、レスリングで金 4 個、銀 1 個、柔道で金 1 個、銅 4 個、ウエートリフティングで 1 個と、11 個をこれらの競技で獲得しているという事実です。

世界から見ると、日本の女性はいまだにしとやかだというイメージで捉えられていますが、そういう競技で日本が活躍しているということは、一つの驚きとして捉えられています。面白い現象です。

そして、ロンドンで実施された 26 競技全てにおいて、女性種目が実施されました。これは、女性にとって、オリンピックの歴史の中で非常に大きなものです。そして、参加した 204 の国と地域全てから女性が参加したオリンピックでした。そして、全体の 44% が女性の選手でした。これからリオの統計も出てきますが、リオでは少し上がっていると思います。

そして、日本はもうロンドン大会、その前でも女性が上回っていますが、アメリカでも、女性の選手が初めて男性を上回ったのがロンドンでした。今、IOC は、新たな競技追加には必ず女子種目を含むことがマストとしています。リオでは 28 競技に増えましたが、ラグビー、ゴルフにも当然女性が参加しています。

世界でもそうだと思いますが、日本の女性のスポーツを見ていると、競技力は非常に向上し、活躍しているのに、前からあったようなイメージがありますが、歴史はまだ浅いです。そして、男性のスポーツからスタートし、スポーツ自体が男性のものだったので、男性の考え方や経験値によって行われている部分が少なくないのが現実です。

ただ、最近になって、女性特有の発育・発達や身体特性などを考慮した育成や強化がスタートしています。女性は、今までは男性の視点から男性の考え方や経験値によって鍛えられていても、これだけの結果を残しています。環境も、男性に比べたら恵まれていません。

大学スポーツ一つを見ても、女性のスポーツは、まだまだ確立されていない部分が多いです。男性の何とか部はあるけれども女性はない、あるいはあるけれども指導者が居ないなど、恵まれていないところがあります。

少年スポーツもそうです。「なでしこ」に上がってくるような選手たちは、少年団としては男の子と一緒にできます。柔道もそうです。でも、中学校になったときに、やる場所がなくなります。サッカーをやりたくてもできません。そして、中学校からは、身体的な差が出てくるので、男の子とは一緒にできなくなります。そういう部分は未だに基盤が脆弱です。そのような環境の中でもこれだけ出しているということは、さらにシステムをきちんと構築して、強力な強化基盤をつくっていけば、伸びる可能性があります。

そもそも、女性がスポーツをするのは、いろいろな目的や意味が価値がありますが、女性の視点から言

うと、スポーツは、自立しているということが、競技力の向上などに非常に役立ちます。誰かに依存するのではなく、自分で判断や決断をし、やりたいことに挑戦し、その気持ちを前面に出して戦うということなので、スポーツが目指す自立というところは、非常に大事だと思います。

ただ、中には、女性の選手たちを自立させたくない指導者が少なからず居るような気がします。ある実業団の監督は、「高卒しか採らない」と明言しています。「大学を出た女は生意気になる。真っ白なままで来てほしいんだ。俺の言うことを聞かなくなる」。それで強い選手を育てられるのか、と思います。

そういった考え方があるからか、女性のトップアスリートの大学進学率は、男性に比べて明らかに低いと思われまふ。もちろん、環境が整っていないということもあります。親の意識もあります。もし、実業団に入れたほうが早く強くなる、そこに特化してできるなら、男もそうあるべきです。では、何で男は保険を掛けて大学に行かせなければいけないのか。オリンピックに専念させたほうがいいのか。女性には、「まあ、いいだろう」という空気がまだあります。

また、管理しないと強くならない。女は見えていないとすぐ甘いものに手を出すという意識は少なからずあります。

恋愛禁止。女は恋愛すると弱くなると言われますが、これは個人差が大きく、男性でも恋愛して弱くなる選手もいます。それでも、「女は恋をすると弱くなる」と、私たちの時代から随分言われてきました。

また、「泣かせてから抱き締めれば、女はいちころ」みたいな考えを持っている指導者もいまだに居ます。正直、昔の競技力だったら、これでいけたかもしれません。でも、今の国際競技力が非常に高度化している現状で戦うときに、この程度の考え方で強化しては、世界で戦えるような自立した女性アスリートは出てきません。

また、「俺は選手の全てを知っている」と、自慢げに言う人がいます。これは、母親が学校に行って、「うちの子に限って」と言うのと一緒です。監督、コーチが知らない面をみんな持っています。それを持っているということが自立です。指導者は、こういうことを乗り越える必要があります。自立した選手でなければ勝てないにもかかわらず、指導は逆行しています。ただし、指導者も選手も相互依存している部分があります。ここは、指導者も選手も乗り越えなければいけない部分です。

2013年、ロンドンオリンピックの翌年に、女子柔道のナショナルチームで選手たちが訴えを起こし、暴力やパワハラという問題提起をしたという背景があります。選手たちは何を訴えたかったかということです。

私が、今回のリオデジャネイロで非常に印象に残り、感動した金メダルの一つが、柔道女子の70キロ級の田知本（遥）選手です。この選手はロンドンの残党です。ロンドンオリンピックにも出場していて、リオにも出ました。ロンドンからリオに連続出場したのは、男子ではたった1人です。女子では、中村美里選手と田知本選手の2人だけです。田知本選手がなぜ金メダルを取れたのかということひもといくと、彼女たちが何を訴えたかったかが分かってくるような気がします。

田知本選手は、依存するタイプではありませんが、やればできるのに、もっとやればいいのかということ周囲に思わせるような雰囲気を持っていた選手でした。そこに、コーチや監督が、さらに、「だから、

おまえたちは言わなきゃやらない。叩かなきゃやらない。殴らなきゃやらない」と追い詰めていったのがロンドンだったと思います。

でも、選手たちは、私たちはトップアスリートで、日本を代表する選手だから、言われなくても本当はできる、やれるという思いがあり、訴えにつながったと思います。実際、リオデジャネイロでは、彼女が唯一の金メダルを取りました。言われなくてもやれるという証明ができたことが、ロンドン後の一つの大きな変化だったと思います。

そういう意味では、ロンドン以降、リオに向けて、柔道界が何を改革してきたのか。これは女性の訴えでしたが、柔道界全体に変革をもたらしたと、私は思っています。暴力の根絶や、(柔道) MIND プロジェクトで人間教育にも視点を当てました。

以前は言われたら有無を言わずやれという上意下達の組織だったし、「俺についてこい」、「意味はないけどやれ」という指導が主流でした。でも、本当に高いレベルで競技しているトップアスリートたちが、意味を感じずにやらされることのつらさといったらありません。「何でこの暑い中、グラウンド 10 周走るんですか」「いいんだ、やれ」。これが疲れにつながります。なぜ走るのかということをお願いしたい。

井上(康生)監督も南條(充寿)監督も、あぁいった事件があったことから選手たちをきちんと信頼し、リスペクトし、選手たちと向き合っただけでコーチをするようになったことが大きかったと思います。その結果、選手たちのやる気を引き出すことができたのだと思います。

今回、男子は全階級で、女子は、2階級を除く5階級でメダルを獲得することができました。柔道は、いろいろな批判もありますが、金メダルを目指しているのに、金メダルを逃したら非常に気落ちします。それで逃してしまったという言い訳のようなものが、昔ありました。

でも、今回、メダルに結び付いたのは、選手たちのやる気や自立にフォーカスしてコーチをしてきた結果だと思っています。コーチが、「やれ」、「メダルを取れ」ではなく、自分たちがやった結果をメダルというかたちで残したいという思いが選手たち一人一人に強く、気持ちの切り替えが早くできて、メダル獲得につながったと思います。

全体の中で言うと、あの事件以降、全日本柔道連盟は、理事や評議員などの役員、ナショナルコーチにも、積極的に女性を活用するようになってきました。ロンドン大会では女性のコーチが12人中2人でしたが、リオでは15人中5人が女性のコーチになりました。これは、どの競技と比べても高い割合です。

事件が起きるまでは、女性の理事は0人でした。女性には適任者が育っていないと言い張っていました。しかし、事件後に外部からの指摘もあって、ある意味では仕方なく女性を採用しましたが、その結果、何か不都合が起きたことはひとつもありません。未だに女性の役員がゼロという団体には参考にしていただきたいと思っています。

世界から見て、日本のスポーツは、これから2020東京に向かう段階において、多くの競技で日本の育成と強化が非常に成功していると映っています。ワールドカップラグビーも、今回のリオを見てもそうでした。隣国である中国や韓国などの国々で、メダルの獲得数が減少している中で、日本の成功は、いろ

いろなかたちで注目されています。これからさらに検証が進んで、何が成功で何が課題なのかも、見えてくると思います。

また、今後の一つの課題になるのは、トップスポーツの活躍が、スポーツ文化の醸成に寄与しているのかどうかということです。今回、オリンピックで日本選手団が活躍したことは、何に寄与したのかということですが、

オリンピックは打ち上げ花火と一緒です。花火を見たときには感動して、「きれいだったね」と言いますが、3日後には忘れてしまいます。わずか4年前のロンドンオリンピックで銅メダルを取った選手を挙げられますか。

つまり、このオリンピックや、これから行われるパラリンピックでの活躍が、単なるイベントで、単なる打ち上げ花火的なもので、「夢だ、勇気だ」で終わってしまっただけでは駄目です。それがどういうふうに世の中の役に立つのか。社会に還元されているのか。トップスポーツが何に寄与しているのかということ、私たちスポーツ関係者は、もっと具体的に示していかなければいけません。

スポーツ全体の価値、特にトップスポーツの価値や意味を考えるうえでは、トップアスリートをどう活用してくか。今回、41名のメダリストが出ました。この人たちがどう生きていくかということは、実に重要です。彼らが、オリンピックで戦ってメダルを取ったことが、そのあとの人生にどういう影響を与えるかということは、ぜひ、検証が必要です。それこそが、スポーツの意味や価値につながります。

これからアスリートたちはテレビ出演の機会が増えるはずですが、何となく感じるのは、最近のアスリートの扱いがお笑いタレントと同じレベルに置かれているということです。リスペクトがあるのかというような番組も、中にはあります。選手たちの側にも、自分の言葉できちんと話せること、リスペクトされる人間であるという意識やプライドも必要です。そういう意味では、なかなか難しいです。

スポーツは社会の縮図なので、2020年の東京に向けては、世界が東京オリンピック・パラリンピックを通して、私たちが注目され、日本社会が注目されて、何を変えていかなければいけないのかを考える良い機会になれば良いと思います。女性のスポーツ、障害者のスポーツも同じです。私たちがどう見られるのかということが大事になってきます。

また、トップアスリートを支援していくというところでは、メダルに対しての執着がどこまで進んでいるのかということも、やはり考えなければいけません。オリンピックもパラリンピックも同様に、今、世界の最高の舞台で活躍できるのは先進国です。それだけのサポートを受けて活躍できるという前提があります。

だから、先進国のエゴになってはいけません。日本の女性スポーツがこれだけ活躍できるのは、未だに世界中の女性がみんなスポーツに参加できる状況ではなく、競争相手が少ないことも忘れてはいけません。能力はあるけれども、女性だという理由で教育を受けられない、スポーツに携われない、私たちが何十年か前に感じていたような状況の国々がたくさんあります。

パラリンピックも同じです。パラリンピックこそ、サポートがなければ出場すら困難です。資金難でパラリンピックに行けない国が、先日、ニュースになっていました。そういう所に対して、リオから東京に

向けて、東京が担うべきものは何か。「うちは 80 個メダルを取ったから良かった良かった」ではなく、国際協力や国際貢献など、スポーツを通して世界の人たちとどう共生し、協力し合ってやっていくかが一つのテーマです。

リオオリンピックを見ていて、ブーイングなど、観客のマナーが結構言われました。報道の姿勢を考える必要は、日本の報道にもあると思います。柔道で言うと、中村美里選手に勝った選手は、コソボ代表の選手です。世界的に見ると、コソボに金メダルをもたらしたことは、すごいことです。一部の報道では採り上げていましたが、日本がそこにどこまで注力したかということです。ブラジルの 57 キロ級の（ハフアエラ・）シルバ選手も金メダルを取りました。彼女は、ブラジルのスラム街出身の選手です。日本は、そういうところを置き去りにしています。日本選手が頑張ったのはいいですが、これから東京に向けて、そういうところも非常に大事です。

私は（日本）バレーボール協会の理事もやっていますが、バレーボールで思うのは、日本さえ勝てばいいのかということです。世界の超一流どころが来ている大会でも、日本戦以外はがらがらです。東京オリンピックで、野球、ソフトボールが採用されます。大きな球場で行われるはずですが、日本戦以外で会場が満員になるでしょうか？日本がどういうスポーツ文化を持っているかということも問われることになります。もちろん、今日のテーマ、女性や障害者ということも含めて考えていくことが必要です。ご清聴ありがとうございました。

<<休 憩>>

【清水】 次は、海外での IDS（International Development and Peace through Sport）についていろいろな経験をお持ちの野口亜弥さんの発表です。よろしくお願いします。

「エンパワーメント実践における課題と可能性」

野口 亜弥（スポーツ庁）

よろしくお願いします。スポーツ庁（スポーツ）国際課に所属しています野口亜弥です。本日は、「エンパワーメント実践における課題と可能性」について発表します。私は、スポーツ庁に勤める前に海外に5年ほどおり、3カ国で暮らしましたので、私がそれぞれの国で日本と比較して見てきたことや実際に体験したことをケーススタディーとして紹介します。

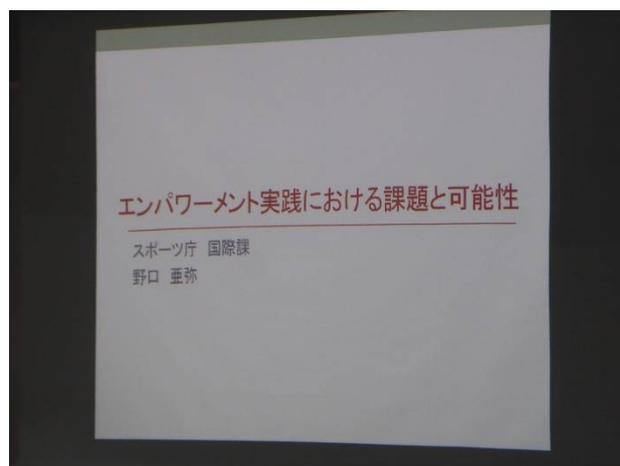
2015年に国際連合が発表した「持続可能な開発目標」の「5」には、ジェンダーの平等が入っています。ジェンダーの平等を実現するためには、例えば、女性の暴力被害の監視、妊娠・出産に関するケア、女性のリーダーシップ、雇用の機会など、いろいろなところでのアプローチが考えられます。

2000年からの「ミレニアム開発目標」を引き継ぎ、「持続可能な開発目標」にもジェンダーが入っていますので、ジェンダーは社会課題の中で非常に大きなところを占めています。

2012年にはUN Women（ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関）とIOCがパートナーシップを締結しました。これは、女性と少女のエンパワーメントのツールとして、これからスポーツをどんどん活用していこうということです。

リオ（デジャネイロ）オリンピック・パラリンピック競技大会では、IOCが女性や少女のエンパワーメントを目的とした「ワン・ウィン・リーズ・ツー・アナザー」というイベントを行いました。最近では、UN Womenのホームページに行くと、スポーツを通じた女性のエンパワーメントの活動のケーススタディーなどが動画でよく上がっています。

このような背景がありますが、次に、私が今まで暮らしてきたアメリカ、スウェーデン、ザンビアの3カ国では、女性とスポーツについてどのような話題があり、それにどう取り組んでいるのかについて話します。



まず、私がどういう立場でそれぞれの国に居たのかを説明します。

アメリカには、大学を卒業したあと、修士を取るために大学生、大学院生として2010年から2013年

まで4年ほど居ました。アメリカでは、大学のサッカーチームやセミプロフェッショナルのチームに所属しました。また、大学では女子サッカー部のコーチもしました。その後、スウェーデンではプロサッカー選手として、女子サッカーのトップリーグに4カ月ほど所属し、契約満了とともに現役を引退しました。そして、ザンビアでは、スポーツを通じた開発のNGOであるNOWSPAR (National Organisation for Women in Sport, Physical Activity and Recreation) でインターン生として働きました。

ここに、それぞれの国のGDPと、世界経済フォーラムが発表している「(ザ・) グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポート」というジェンダーギャップのランキングを書きましたが、国の経済力やジェンダーの平等性がそれぞれ異なる国で見えてきたことを日本と比較し、日本が抱える問題を私なりに提示したいと思います。

私の整理の中での日本の課題の一つ目は、スポーツ界において女性が直面している問題が見えづらい状況にあるということです。二つ目は、女性と少女のエンパワーメントのツールにスポーツが活用できるという認識がまだまだ低いということです。三つ目は、女性と女性スポーツの社会的位置付けが低いということです。なぜこのような整理になったのかは、今からそれぞれのケースを紹介するかたちで考えていきます。

まず、私は、アメリカではスポーツ界において女性が直面している問題が非常に分かりやすいと感じました。

前回の(FIFA)女子サッカーワールドカップは、2015年にカナダで行われましたが、試合会場が人工芝でした。男子では、そういうことは絶対あり得ません。そこで、アメリカ代表の(アビー・)ワンバック選手は、なぜ女子は人工芝でよくて、男子は天然芝なのかということで、4千名ぐらいのプロサッカー選手や関係者から署名を集め、FIFAとカナダサッカー協会に訴えました。最終的に、女子サッカーワールドカップを二度と人工芝でやらないということをFIFAと約束し、この問題はいったん終了しました。

また、アメリカでは、男子サッカーより女子サッカーのほうが競技成績がいいにもかかわらず、男子サッカーと女子サッカーの代表選手の給料の差は20倍ぐらいあります。それはおかしいということで、女子サッカー代表選手達がアメリカの上院に訴え、今、その訴えが通ったという状況です。

さらに、私が居た大学で実際に起きたことですが、女性監督と男性監督の間で、給料の差が生じていました。女性監督は、男性監督が一つのチームを見る給料と女性監督が二つのチームを見る給料が同じなのはおかしいと大学に訴えました。そして、大学との交渉により、最終的には男性と女性の給料差がなくなりました。このように、アメリカでは、影響力のある現役選手や現役監督がスポーツ界における平等についての問題提起を積極的に発信している現状があります。

私は、アメリカに居たときには、なぜこれほど大きい声で問題提起できるのかがなかなか見えませんでした。引退したあと、ザンビアで開発のツールとしてスポーツを活用しているのを見て、アメリカではなぜこのような現象が起こるのか、自分自身の中で整理ができました。

スウェーデンでサッカーを引退しましたが、引退する3年ぐらい前から、スポーツを通じた女性と少女のエンパワーメントをどうしても現場で勉強してみたいと思っていました。引退をきっかけに時間が

できたので、開発途上国でスポーツを通じたジェンダー開発をしている NGO において、現場で学びたいと思い、直接連絡を取り、縁があったところがザンビアの NOWSPAR という NGO でした。

NOWSPAR は、スポーツ界における女性の権利の擁護と社会全体の女性の権利をスポーツを通じて擁護するという二つのミッションを掲げて活動しています。では、実際、NOWSPAR がスポーツ界の平等やスポーツを通じた社会的な男女平等にどう取り組んでいるかについて少し紹介します。

一つ目の大きな活動としては、スポーツ団体に対するポリシー制定のコンサルティングをしています。開発途上国にはスポーツ NGO が多くありますが、開発途上国ということもあり、組織の中にポリシーやルールなどあまり整備されていないのが現状です。そこで、国内の競技団体やクラブチーム、スポーツ NGO の中でジェンダー平等のポリシーをきちんと作っていかうということをコンサルティングしています。そういったポリシーを組織の人たちと一緒に作っていくコンサルティングをする中で、その組織で働いている人たちも、ジェンダーを考慮した雇用や昇進の方針について学んでいきます。男女平等のポリシーだけでなく、女性によくあるセクシュアルハラスメントの問題や児童擁護のポリシーも、組織の中で一緒に作っていきます。

組織がこういったポリシーを持っていることは、例えば、不当な扱いを受けたときや平等性に欠ける問題が起きたときに、「なぜそういうことができるのだ」と組織を訴えることができます。ポリシーを作り、職員や関わる人たちを守ることができる組織の仕組み作りにも役立っています。

二つ目は、スポーツ界で女性のリーダーを増やすこととネットワークを強くするという活動です。開発途上国ではまだまだ、社会的に男性がいろいろなことを取り仕切っていますので、スポーツ界に限らず、女性のリーダーが組織内で孤立することが多く、ザンビアも例外ではありません。

そこで、女性リーダー研修等を行うことによって、必要なリーダーシップスキルを身につけるためのトレーニングを女性に受けてもらいます。組織は違えど、女性が直面する問題は似通っていますので、「私は、こういうふうに解決したから、あなたも、こういうふうに解決できるんじゃないか」という情報のリソースを共有するためのネットワークの構築にもなっています。

これは、実際にザンビアの女性リーダーシップ研修で撮影した写真です。この中には女子ネットボールチームの監督を 30 年間していた女性が居ますが、彼女は、アフリカ大会に進んだ際に、「あなたは中学校の学位しか持っていないから監督から降りてください」と言われました。この研修では、それをどのように解決すべきかを参加者でディスカッションし、どのようなサポートができるかという議論をしました。

さらに、女性リーダーを表彰することも NOWSPAR はしています。ザンビアは、社会的に女性に対するステレオタイプが根強く残っていて、「女性だから、これができない」という意識を無意識のうちに持つことが多いです。そこで、女性リーダーを積極的に表彰することにより、女性リーダーが活躍していることを地域に暮らす人たちにも知ってもらい、女の子たちが、「私も、あんなお姉さんになりたい」と思ってもらうことで、次世代の女の子のエンパワーメントにも役立てています。女性リーダーが表に出ることにより、男性に対して女性の活躍を表現する場にもなり、男性が持つ女性に対するステレオタイプ

にも変化を与えることも狙いとしています。

三つ目は、メディアへの積極的なプロモーションの活動です。いい活動をしていても、なかなか多くの人に伝わらないと、その活動の意味がどうしても見えづらくなります。そこで、積極的にメディアを活用することによって、女性の問題や女性とスポーツの問題を多くの人たちに発信し、同時に、その問題に対して NOWSPAR がどう取り組んでいるのかを発信しています。女性を扱ってくれるメディアが少なく苦労をしているみたいですが、一つの大きな活動として NOWSPAR が力を入れています。

四つ目は、スポーツを通じて生きる力を学ぶという活動です。ここが IDS にもつながるところですが、スポーツをきっかけにして、女性が人権、妊娠・出産、公衆衛生、コミュニケーションスキル、リーダーシップスキル、IT スキル、資金運用といったスキルを高める、知識をつけることを積極的に行っています。

ザンビアは開発途上なので、目に見えて女性のほうが雇用の機会が少なかったり、暴力被害に遭ったりします。例えば、暴力被害を受けて嫌だなどと思って、我慢することが普通だと思っている子どもや女性も多く、彼女たちに対して、嫌なことは嫌だと言っていいという人としての権利の話をします。

また、今は少し変わってきているらしいですが、ザンビアは、学校で保健教育を取り扱うことがタブーでした。それが原因で、10代での望まない妊娠や出産、HIV 感染によるエイズのまん延などが社会問題になっています。そして、男性が前に出る社会であると、女性は表に立って話すことが苦手で、プレゼンテーションスキルやコミュニケーションスキルを高める場がないときもあります。さらに、雇用機会を設けるために就業スキルを高めようとしても、スラム出身の子たちは、パソコンも触ったことがない状態です。そこで、スポーツを通じて、こういうスキルを高めていこうということです。

では、どうやってスポーツを通じてスキルを高めるのかということですが、私が実際に見た方法は2通りありました。

一つ目は、スポーツをしながらスキルを高めます。例えば、サッカーやバスケットボールなどのボールゲームを行います。このゲームをうまくやるためには、人とコミュニケーションを取らないといけない、周りの様子を見なければいけない、周りを感じなければいけないなど、いろいろなスキルが必要です。そこで、そのゲームがうまくいくように、そのスキルをみんなを高めてトレーニングに取り組みます。

そして、ボールゲームが終わったあと、すぐに小さなディスカッションをします。「じゃあ、今、みんながこのスポーツ活動で高めたスキルって、実際の社会や日常生活でどういうところに応用できるかな？」などの質問を投げかけ、参加者がディスカッションをすることにより、子どもたちは、スポーツで鍛えたスキルや技術を日常生活のどの場面で生かすことができるのか、その方法を自分たちで学びます。このようなスタイルでスキルのトレーニングをしていました。

二つ目は、スポーツ大会やイベントをきっかけにして知識を学びます。「妊娠・出産の教育をしますよ」、「HIV 感染によるエイズの教育をしますよ」と言っても、あまり子どもたちの興味をひく内容ではないので、子どもたちはそれほど集まりませんが、「サッカーの大会をしますよ」、「バスケの大会をしますよ」と言うと、面白そうだし、楽しいと集まります。

このように、スポーツが持つ楽しさや人を集める力を活用して子どもたちを集めて、「じゃあ、せっかくみんなで集まったから、みんなのためになるような勉強も少ししようね」ということで、人権教育や HIV 感染によるエイズをどうやって予防するかという知識を学びました。

右上の写真は、実際のトレーニングが終わったあとに、そのトレーニングで高めたスキルを日常生活にどのように落とせるのかを、子どもたちがディスカッションしているところです。

その隣の写真は、二人の女性がトレーニングや課題を説明しているところです。この女性たちはスポーツ指導員ですが、二人ともスラムの出身で、雇用の機会がなかなか得られず、さらに就労スキルを高める教育機会が少ないという状況でした。しかし、スポーツ指導員として子どもたちに指導し、人前でプレゼンテーションすることによってコミュニケーションスキルなどを高めています。

右下の写真は、その女性たちが実際にスラムで子どもたちに何かゲームを教えているところです。

左下の写真は、IT スキルを高めているところです。ボランティアのスポーツ指導員として 25 歳以下の若い女性が何人か来ていますので、ボランティア指導員たちは、NGO が持っているコンピューターを使用し、ボランティアとして仕事をする課程で必要な書類を作ることで、同時に IT スキルも高めてもらいます。彼女たちは、コンピューターをほとんど触ったことがありませんので、スポーツを通じてこのような機会が得られているという状況です。

私は、ポリシーの制定、リーダーシップ教育、メディアへのプロモーションなど、ザンビアでいろいろな活動をする中で、女性に起きている問題をきちんと発信することと、その発信するスキルや知識を女性自身が高めていくことが全て同時に起こる必要があります、それができて初めて女性のエンパワーメントが進んでいくのだと実感できました。そして、アメリカを振り返ったときに、なぜ選手たちが発言できるのか、問題提起できるのかが少し整理できたと思っています。

最後に、スウェーデンの話をしてします。私は、プロサッカー選手としてスウェーデンに 4 カ月程度居ました。スウェーデンは、男女平等が非常に進んでいる国で、ランキングでも 4 位ですが、そもそも女性と女性スポーツに対する社会的な価値が非常に高い国だと感じました。

私が居たのはダームアルスヴェンスカンという、スウェーデンのトッププロリーグです。このリーグはプロリーグとして成立していて、大学生以上のチームメートは全員プロ契約で、プレーに専念できました。

もう少しお金を稼ぎたいと思ったら、チームが斡旋してくれる会社で週に 4、5 時間働いて、お小遣いを稼ぐこともできました。もっと上の選手になると、練習着以外の移動着や服などがチームから支給されたり、車のリースを受けていたり、環境が非常に整っていました。

ですから、女子の選手に対しても、選手としてプレーに専念する、もしくはセカンドキャリアを考えて大学や大学院に行きながら、プロとして収入を得てサッカーができる環境が調っていました。

スウェーデンでは女子サッカーのためにどのようにして資金を集めているのかという話をチームのマネジメントをしている方に伺ったところ、スウェーデンの中でも女子に対してお金を集めるのは大変だという思いはあるものの、日本よりも企業や周りの人たちが、女子だからというわけではなく、女子にも

きちんとお金を投資して、その分、企業のプロモーションに活用したいという思いがあるということでした。また、社会的にも、そういった雰囲気があるようでした。

私が居た町は、スウェーデンでは5番目に大きい街でしたが、それほど大きくなく、私が町を歩いていると、町の人たちからは、「プロサッカー選手だね」とリスペクトの目を向けてくれ、選手として、アスリートとして迎え入れてくれているのを感じました。

私が居たチームはリンシェーピングフットボールクラブと言いますが、毎年、プロモーションビデオを作っていました。しかし、フェミニンなプロモーションビデオではなく、林の中で筋トレをしているような力強さが伝わるプロモーションビデオです。それをわざわざ女子のチームのために作成してくれていました。また、スポンサー企業と一緒に対して、選手がマーケティングにも協力し、チームとして女子チームに力を入れていました。このように、スウェーデンの国内には、チームを挙げて積極的に女子チームのプロモーションをしてくれる雰囲気があると感じました。

次に、2020年の日本の課題について話します。アメリカ、スウェーデン、ザンビアと見てきましたが、同じような状況でも、日本のスポーツ界は海外の国と比べて、女性が直面している問題が見えづらいと感じます。

サッカーの話で言うと、例えば、2012年のロンドン大会のときに、男子はビジネスクラス、女子はエコノミークラスでロンドンに入りました。アメリカのメディアでは、それが問題視されましたが、日本のメディアは、そこまで問題視している感じは残念ながらありませんでした。また、選手たちも、「結果を残すしかありませんね」とコメントを残し、全体的に大きな問題点とされる部分が見えづらかったと思います。

IDSの観点で考えると、女性のエンパワーメントのツールにスポーツが活用できると言われています。開発途上国では、開発にひもづけてスポーツを活用していますので、そういうことが多くの場面で見られました。私の経験から、日本へもそういう要素はもっと還元できるのではないかと考えています。

また、スウェーデンは、今まで自分自身が日本やアメリカで感じていたよりも女性としての社会的位置付けが高く、女性スポーツに対しても、周りからリスペクトの目で見られます。そういうところで、社会的なジェンダー平等と女性スポーツの発展はひもづいていると感じました。

では、この課題を2020年に向けてどう解決していくのか。今、私が日本のチャレンジとして考えているのは、まず、問題点を可視化するために、アスリートや現役指導者など、影響力を持つそれぞれの関係者が問題提起できる発信を増やすということです。影響力のある人から問題提起されると、メディアも、それを問題としてきちんと捉えてくれやすくなるのではないのでしょうか。

そのためには、女性アスリートや関係者が、女性だから我慢しなければいけないという思いを取り払い、我慢せずに正当な権利として主張していいという学びや、自分の身を守りながら、どうやって自分の主張を通すかというコミュニケーションのトレーニングなども同時に行っていかなければいけないと考えました。

また、せっかく勇気をもって発信してくれた人が、その発信のせいで傷ついたり、二度とスポーツ界に

戻れないということは絶対あってはいけませんので、そういう人たちを守るための制度やシステムも調べていかなければいけないと感じています。

そして、エンパワーメントのツールとしては、「2020年に向けて女性リーダーを30%に増やしましょう」とありますが、スポーツ界でも、それに対して努力をし、女性リーダーを増やし、スポーツ界がロールモデルとなれるように意識を持たなければいけません。女性リーダーが30%居ればいいというわけではありませんが、女性リーダーが意思決定の場に増えれば増えるほど、女性にしか分からない問題が議論のテーブルに上がりやすくなり、問題提起が起きると思います。

最後に、社会的地位の向上についてですが、今の日本で、「女性スポーツに男性スポーツと同じぐらい投資しましょう」と言っても難しいと思います。しかし、女性スポーツをうまくマーケティングすることで、女性スポーツが持っているイメージの変革は起こせます。また、今はSNSやインターネットが進んでいるので、スポーツクラブや競技団体は、それほどコストをかけずに、女性スポーツが持っているイメージをどんどん変えていくことができる可能性があります。

先ほどパラリンピックの例もありましたが、今、「日本のパラリンピアンはすごいね」と言われているのは、プロモーションがうまくいっているということもあります。プロモーションにより、「障害者のスポーツ」というイメージから「アスリートのスポーツ」というイメージに変革しました。このように、メディアの力は大きいです。

だからといって、メディアからのアクションを待っていてもなかなか進まないで、自分たちからイメージの変革を起こすようなプロモーションをしていけたらいいと考えています。これを2020年に始めては遅いので、2020年に向けて、できるところから少しずつやっていくことが日本のチャレンジではないかと思います。

以上で私の発表を終わります。ありがとうございました。

【清水】 野口さん、ありがとうございました。

内田さん、山口さんと話をさせていただいたあと、野口さんにはIDSのさまざまな現場を経験されたことを踏まえて、今、世界では、スポーツをツールにしたさまざまな変革の波がどのように起きつつあるかを話していただきました。スポーツの現場からの問題提起の発信、権利主張のためのツールとしてのスポーツ、女性スポーツのマーケティングなど、継続的に変革を起こすことで変えることができないか、スポーツを通して、スポーツによって、何をどう変えていけるかというところまでまとめていただきました。

それでは最後になりますが、山口理恵子さんには、少し理論的なところも踏まえていただき、最後のまとめもお願いしながら、話していただきます。よろしくお願いします。

「スポーツ環境の変革に向けた研究・教育の課題と可能性」

山口 理恵子（城西大学）

よろしくお願いします。城西大学の山口理恵子です。

私に与えられたお題は、2020年東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境の変革に向けた教育・研究の課題と可能性についてです。

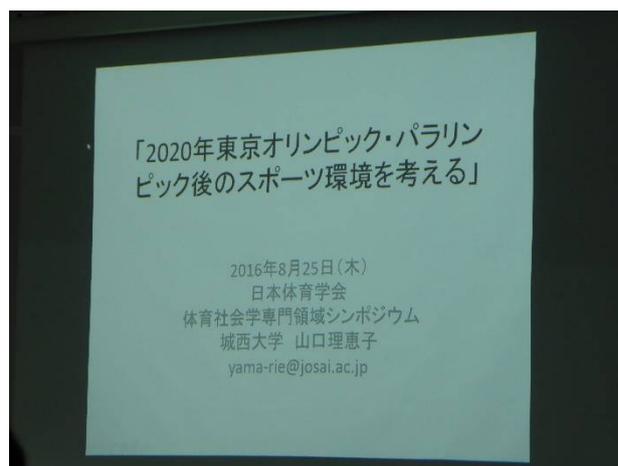
今、いろいろと話を聞いていて思うことは、まだまだ「女性スポーツ」という括りで語らなければいけないことと、「女性スポーツ」という括りでは語りきれないことがあるということです。

リオオリンピックが終わったあとで、皆さんいろいろな思いがあると思いますが、私は、オリンピックに若干興奮して、すでに行き着くところまで来てしまったと感じております。それは今回のドーピング問題もそうですし、これから話す女性の参加をめぐる話もそうです。

清水先生の冒頭の紹介の中で、2015年の『現代スポーツ評論』（創文企画）で特集された「女性スポーツの現在」についての話がありましたが、私も構想の段階で少し関わりました。

実は、時を同じくして、今年1月に『Sex Roles』というジャーナルも女性スポーツ特集を組みました。『Sex Roles』は、1975年から発刊されており、スポーツだけではなく、スポーツ以外の事象についてもフェミニズムやジェンダーの視点で批評した論文を扱っています。その『Sex Roles』で、2014年、2015年に単独で発表された論考を集めて、「女性スポーツの未来」という特集が組まれました。

論文9本のうちメディア研究が3本と「ガールズ・パワー・プログラム」に関する論考がありましたので、今日いらっしゃる他のパネルの皆さんのお話と関連させながら、レビューしたいと思います。最後にその課題と可能性について話します。



そもそも、なぜ、今「女性スポーツ」なのか。本当は、このシンポジウムを企画した清水先生や他の先生方にも、この「なぜ」についてぜひ聞きたいところですが、その前に、こういう女性スポーツをめぐる動画を見たいと思います。

(ウイisper 『Rewrite the Rule』 キャンペーン動画視聴)

ウイisper という女性のナプキンなどの製品を造っている P&G が、このような少し実験的なキャンペーン動画を作りました。アメリカは、ご存知の通り多くの女性アスリートがスポーツ界で活躍していますが、そのアメリカでさえ、「女みたいに走ったり蹴ったりするとはどういうことなのか」と問いかけると、まだあのようなステレオタイプが出てくる、ということがわかる非常に面白い動画です。

このような状況がある一方で、2020 年以降のスポーツ環境を探る手掛かりとして「障害者」や「女性」がキーワードになるというのは、いったいどういうことか、というのが私の最初の疑問でした。そして、どういうコンセンサスで話をしていけばいいのか迷いました。

いろいろな分野で女性が少ないとか、男性より低い立場にいるという現状はもちろんありますし、それが、いわゆる女性スポーツの文脈でしばしば取り上げられる「問題」だったと思います。では、女性をスポーツ（の意思決定の立場）にインクルードしたり、様々な機会において男性と均等にしていくことだけが「女性スポーツ」を扱う理由にしているのだろうか、そもそも多様性とはいったいどういうことを意味するのか、についてもっと考えていかなければいけないと思います。このことを考えるきっかけとして、まず『Sex Roles』の特集に掲載された論文をみていきたいと思います。

Sex Roles の論文について:メディア研究

メディアに関する研究では、「Microaggressions and female athletes」という論文があります。例えば、アメリカ市民であるにも関わらず、アジア系移民の家族をもつ若い人たちに対して、「あなたは何人ですか。あなたの出生はどこですか。あなたはいったい何者ですか」と聞くことが典型的なマイクロアグレッションということなのですが、マイクロアグレッションとは、例えば、アジア系のルックスを持つ人はアメリカ市民ではない、という白人種を中心とする前提のもと、マイノリティや被支配層に向ける巧妙かつ攻撃的な言動を指します。マイクロアグレッションという概念から、女性アスリートの表象を分析するというのがこの論文です。次の「Images of sports women: A review」は、ニュージーランドとオーストラリアの写真の表象について比較し、レビューをしています。

最後の「New rules for new times: Sportswomen and media representation in the third wave」というトニ・ブルースの研究は、今までの女性のスポーツにおけるメディア表象を具体的にまとめておりますので、紹介したいと思います。ここでは最初と二番目の論文の詳細について触れませんが、メディアに関するこれら三つの研究で、女性に対する社会の期待はこの 2、30 年で大きく変わってきているにもかかわらず、女性スポーツのメディア表象はさほど変わっていないという共通の問題意識があったということは述べておきたいと思います。

トニ・ブルースの功績は、女性スポーツあるいは女性アスリートに向けられるメディア表象を 13 個の法則に分け、説明している点です。

1 番目の法則は、男女の差異をことさら強調している報道です。「女性スポーツは男性スポーツと比べて見劣りし、誰も見ない」という価値観に基づいて、女性スポーツに関する報道の生産価値が非常に低く見積もられています。

2 番目は、ジェンダーの印づけです。例えば、「男子サッカー」とはあえて言われませんが、「女子サッカー」の場合は必ず「女子」が付きます。

3 番目は、女性アスリートを「何々ちゃん」と呼び、子ども扱いします（例えば、福原愛選手のこと「愛ちゃん」と呼ぶなど）。英語圏では、ファーストネームで呼ぶことも子ども扱いと考えられます。

4 番目は、家族や恋人、容姿、性格など、スポーツとはあまり関係のない文脈の話題が強調されることです。

5 番目は、「女三四郎」、「女ベーブ・ルース」など、男性スポーツや男性アスリートに例えられる表象です。ベーブ・ルース選手のような卓越した競技力を有する女性アスリートという意味ですが、これは男性が基準・標準という前提から来ています。

6 番目は、「女性は重要ではない」とするこれまで根強く存在してきた表象です。

7 番目は、強制的異性愛です。異性愛カップルや母として女性を表象するケースです。

8 番目は、女性アスリートを性的に扱うということです。

9 番目は、強いかわ美しいかの二律背反的に捉える表象を指します。

10 番目の「類似性」は、試合中の描写は男女でほとんど同じであるということ、

11 番目の「真剣なアスリート」も、競技に真剣に取り組む女性アスリートを表象する際に、タフさや成功といった男性アスリートと似たようなストーリーがつくられる、という点です。

ただし、女性がジェンダー化されない、女性らしさを付与されないのは、国際大会などでナショナリズムの要素が非常に強まっているときです。そういうときは、男性と同じように、メダルを取ったアスリートというかたちで「モデル市民」として扱われます。これが 12 番目です。

では、女性はどのように扱われるのか。いわゆる「白人」でブロンドで青い目の女性アスリートたちは、「海外の美女アスリート」というカテゴリーで性的に表象されることがあります。一方で、日本の金メダリストの吉田沙保里選手などは、「日本の（私たちの）吉田」というように性的なカテゴリーとは違う扱いです。これが 13 番目の「私たちと彼/彼女ら」です。

スポーツにおける女性の表象について研究され始めた 1980 年代から、すでに 30 年以上経ちますが、表象内容はあまり変わっていません。これは重要なポイントです。いくら女性が強くなっても、逆に、女性が強くなればなるほど、ジェンダー化する表象が強まっていくようにも思えます。

次に、ブルースの 13 個の表象に関する批評についてです。スポーツをする身体は、ジェンダーというカテゴリーだけではなく、人種、民族、セクシュアリティ、年齢、階級、障害といった多種多様な権力関係の中にあります。それにもかかわらず、フェミニズムの研究や女性スポーツを扱う視点のメディア研究は、その交わりを非常になおざりにしていないか、ジェンダーばかり抽出し、男女の差異の不平等ばかり強調していないかという視点です。このような議論は「スポーツは男性中心主義だ」とスポーツと男性性を結び付けた前提であるため、フェミニズム研究や女性スポーツ研究そのものが、逆説的に「男性は～、女性は～」というジェンダーの二項対立を強化してしまったと端的に言っています。

最後にブルースは、「行為主体としての新たな法則」と題して言及しています。すなわち、インターネ

ットや SNS によって、女性アスリートが自分たちの声として語っていく機会が増えていることと、「強い女性 vs. 女らしい女性」を対立的に考えるのではなく、「かわいくもあり、強くもある」という表象が現在においては主流になってきていることについてです。

皆さんは、ワンダーウーマンをご存じでしょうか。スーパーマンのように強くて「正義の味方」であると同時に、セクシーで美しいとされる容姿で描かれてもいて、現在の女性アスリートが引き継いでいる姿のようにも映ります。また、このようなあり方が女性のエンパワーメントのありようなのか、という議論もあります。

右側の写真は、「レジェンズ・フットボール・リーグ (LFL)」と言いますが、もともとは「ランジェリー・フットボール・リーグ」と呼ばれていました。男性のアメリカンフットボールのハーフタイムのショーとして、本当にランジェリーのようなコスチュームとそれを強調するような防具を着用して行われていました。私は、2012年から2015年までカリフォルニアに滞在していたときに、LFLを2回ほど見ました。初めて見たときは、ヴィクトリアズ・シークレット（女性の下着ブランド）とラスベガスのショーとプロレスを足して3で割ったような衝撃を受けました。

アメリカでは、女子のアメリカンフットボールよりも、LFLのほうがビジネス的に成功していると言われており、強さとセクシーさを併せ持った現代の女性スポーツのあり方を、LFLが非常にわかりやすい形で体現していると思いました。しかし残念ながら、ブルースの論文では「かわいくもあり、強くもある」という女性アスリートの現代的表象を紹介しただけにとどまり、深く分析されているわけではありませんでした。

Sex Roles の論文について: ガールパワー・プログラム

次に、ガールパワー・プログラムについてです。先ほど野口さんから、開発途上国のザンビア等では、女性のエンパワーメント教育がスポーツを通じて行われているという話がありました。スポーツを通じた少女のエンパワーメントプログラムは、開発の文脈で応用される前の1990年代から、米国女性スポーツ財団をはじめとする女性スポーツに関わる組織で行われていました。

ローレン・ロースチャーとシェリル・クーキーは「Ready for anything the world gives her?: A critical look at sports-based positive youth development for girls」と題して、スポーツをツールとして少女への教育や発達を促進するプログラムに対して批判的な問いかけをしています。

「ゴー・ガール・ゴー!」というプログラムは、もともと、スポーツ、身体活動を通じて少女たちの心理、社会、認知的能力の形成に寄与する目的で始まっています。自信をつけたり、スポーツを通じて人格形成をしたり、能力を開発したり、つながりや思いやりを身につけ、コミュニティへの貢献度を高めていくことを意図していました。さらに、そのようなスポーツ・プログラムを通じて、反社会的行為や、10代の妊娠、貧困等の社会問題に陥らないようにすることも想定されていました。

ロースチャーとクーキーによると、開発領域まで応用されているこのようなスポーツを通じたプログラムは、逆境にある人がその状況を克服していくとするレジリエンス理論をベースとしており、その中で発せられる「ガールパワー」の言説が、自己責任、個人レベルのエンパワーメント、消費主義が強調さ

れる新自由主義セオリーと結びつき、非政治的なキャンペーンになっていると批判しています。個人のエンパワーメントから社会的な変革を生み出していくというのが、エンパワーメントのそもそもの概念ですが、最近の新自由主義に基づいたガールパワー・プログラムは、「少女が頑張れば、うまくいく」、「少女が経済力を持つことがエンパワーメントである」ということばかり強調されがちで、ジェンダーや貧困などの社会にある問題が見えづらく、変革に関する議論になかなかつなげていきません。この点については、ロースチャーとクーキー以外の研究者も指摘しています。

また、スポーツベースのユースプログラム、特に女子に対してのプログラムは、運動によって肥満を解消しなければいけないという社会問題に対する応答のようでありながら、ファットフォビア（肥満に対する恐怖）をあおっており、健康的な食事と運動の推進が、サイズダウンやスリムになることへの関心を高めてしまっているとロースチャーとクーキーは指摘しています。

「女性スポーツ」を議論する意義

では、もう一度、なぜ女性スポーツなのかについて考えてみたいと思います。また、なぜ多様性なのか。女性、障害者、マイノリティをスポーツにインクルードしていくこと、それが多様性なのか。今回のリオオリンピックには難民選手団がありましたが、多様性を生み出していくというのは、抑圧されてきた人たちやマイノリティとされてきた人たちを自分たちの土俵に入れればそれでいいのでしょうか。

私は冒頭で、「女性スポーツ」という括りだけでは語れないことがあると言いました。近代競技スポーツは、理解可能な、首尾一貫した、「女性」を承認しなければならない枠組みやルール、すなわち、セックスチェック、IF（国際競技連盟）やIOCの規則、メディア表象とともに今日まで来ました。だからこそ、女性スポーツの存在は、承認の枠組みやルールを問い直す契機として重要です。例えば、高アンドロゲン症やトランスジェンダーのアスリートたちは、性を二つだけに分けることの難しさを教えてくれます。すなわち、当たり前のように語っている「女性スポーツ」の「女性」とはいったい誰のことなのか、という問題に直面するわけです。

またこのような問いかけは、前近代から近代にかけてあからさまな暴力はなくなっていったと言われますが、近代オリンピックや現在のスポーツには、暴力が隠微な見えないかたちで残っているのではないかと指摘できるかもしれません。すなわち、ベンヤミンの「暴力批判論」（ヴァルター・ベンヤミン著・岩波書店）における承認の暴力という視点です。女性アスリートとしてオリンピックに出場するためには、現在のところ、アンドロゲン値など、医学・科学的基準値によって「女性」である／ないの判断をされ、競技への参加を許可されたり、されなかったりする。アンドロゲン値が全ての競技パフォーマンスに有利とは言えないにもかかわらず、です。男か女かの二つの性別に分けなければならないという前提のもと、性別の解釈は、性染色体からアンドロゲン値に判断の基準を変更させてきた経緯があります。承認の基準として医科学の指標が使われているのですが、判断基準が変わってきているということから、その指標が必ずしも完璧ではないことも知っておく必要があると思います。したがって、この点から「女性スポーツ」は議論の遡上にのぼる意義があると言えます。

課題と可能性

女性スポーツを研究する人たちも、いつも、競技スポーツの中で「男性から差別されている」とか、「スポーツ界は男性中心主義だ」という議論をしてきましたが、競技スポーツではないところにもっと注目した研究があってもいいと思っています。

スポーツの高度化と商業化がどんどん高まり、スポーツの大衆化は、長い間、日本の課題でした。その点からしても、スポーツの価値を多様化することが大切であり、いつも競技スポーツを土俵にして話す必要はないということです。また、今は一億総活躍社会で、日本を自画自賛するテレビ番組がたくさんあり、この状態を「戦前回帰」と評する人もいます。メディアが映し出す価値が非常に画一化しており、今回のリオオリンピック報道でも「感動」「勇気」といったあいまいな言葉が定型句のように繰り返されていました。この状況を打開するためにも、スポーツの大衆化やレジャーに関する、競技スポーツ以外の議論をもっと深めていく必要があると考えます。

また日本では、「女性とスポーツ」というテーマはあったとしても、セクシュアリティをテーマとした議論がまだまだ少ないように思います。LGBTの問題は語りづらいと思っている研究者や、存在しないものと考えている人も未だにいるのかもしれませんが。このテーマはもっと幅広く研究の分野で議論されていく必要があります。以上が、私が考える研究の課題です。

次に可能性についてですが、私は、フィジカルエデュケーションとしての体育の改革に注目しています。日本では中学生女子の運動離れが問題視されていますが、彼女たちがなぜ運動・スポーツをしたくないのか、どのような身体活動に興味があるのかなど、女子の声やニーズに耳を傾ける必要があるように思います。またそうすることで、画一化している現在のスポーツの価値を押し広げる可能性もあるように感じています。そして開発の分野だけでなく、体育の授業の中で、少女たちがエンパワーされるプログラムを作ってもいいのではないかと考えています。つまり、身体教育である体育授業であるからこそ、セクシュアリティやリプロダクティブ・ヘルス・アンド・ライツなど、権利意識を高める「包括的性教育」を展開することが可能なのではないかと考えています。

【清水】 ありがとうございます。映像と表象と身体は、このシンポジウムの重要なポイントです。そのことについて、行為主体としての新たな語りという点で、一つの提案をしていただきました。また、ベンヤミンをベースにした「承認の暴力性」を採り上げて、考えていただきました。

では、杉本さんにディスカッサントとして10分弱ぐらいでコメントをいただきます。よろしくお願いいたします。

【杉本】 4名のシンポジストの方、ありがとうございます。非常に刺激的で熱のこもった話を聞かせていただきました。

本来は、ここでディスカッサントが質問を投げ掛けてディスカッションをしていきますが、時間がありませんので、コメントというかたちになるかもしれないことをお許しください。

最初の内田さんの話で非常に面白いと思ったのは、障害者スポーツの環境に着目したことです。その

中でも、とりわけ今は心のバリアーが問題だということでした。

この話を聞いて、私は、数年前、日本の記者がテニス界の世界的プレーヤー（ロジャー・）フェデラーに、「日本の選手は、どうして世界的なプレーヤーになれないんでしょうか」と質問したことを思い出しました。そのとき、フェデラーは、「何を言ってるんだ。日本には国枝慎吾が居るじゃないか」と答えました。鮮やかです。国枝慎吾は、車いすテニスの世界チャンピオンで、グランドスラム四大大会を制覇しています。

これは日本のメディアにおけるスポーツの考え方が如実に表れた言説だと思います。フェデラーは、車いすテニスも自分のしているテニスも全く同じで、いわゆるテニスのバリエーションにすぎないと考えています。

心のバリアーがあるということは、何か正解があって、それと違うものを認めないことです。やはり、これからはフェデラーみたいな考え方を持つ人を増やしていくことが必要だと思いました。



これは、スポーツの多様性ということでも括れます。多様性を認めないスポーツは、文化として存在しません。文化の基本は多様性です。その意味で、日本も障害者スポーツを通して「スポーツ文化」を考える状況に来ているのではないかと思います。

もう一つ、制度のバリアーと言われましたが、私はその中に経済制度も一つあると思います。例えば、パラリンピックのクロスカントリー（スキー）で、ワックスを買う資金が不足しているということがありました。そういう場合、国に言うこともできますし、スポンサーをつけることも考えられます。しかし、それを聞いたある人が、「じゃあ、ワックスのお金をみんなから集めよう。寄付を募ろう」ということで、いわゆるクラウドファンディングを立ち上げました。これを実際にやったのは米良（はるか）さんですが、彼女は、これをきっかけに、READYFOR という日本最大のネットによるクラウドファンディングをつくっています。

今は、やりたいことがあったときに、国やスポンサーに頼るのではなく、クラウドファンディングで自分たちで支えるという寄付文化が芽生え始めています。もちろん、協会に頼ることも必要だと思いますが、具体的に私たちみんながもっと支えることで、逆に心のバリアーも解けてくると思います。

私たちには、これからそういう発想が必要です。スポンサーや国に頼るのではなく、自分たちでスポーツを支える社会をつくっていく、これはオリンピックやパラリンピックだけではなく、スポーツの世界全体に言えることです。

次に、山口香さんの話を聞いて、データがすごく面白いと思ったのは、指導者の問題です。1964年の東京オリンピックの大松（博文）監督の「俺についてこい」から始まって、『エースをねらえ!』（山本鈴美香著・集英社）の宗方コーチなど、女性スポーツにおいて、カリスマ的な支配の指導者が一つの像とし

て綿々と続いているのであれば、これを打破しなければいけません。

そのためにも、柔道は科学的なトレーニングをするコーチをたくさん入れることで、あれだけメダルを取れた、競技力が上がったということをもっとアピールしてもらいたいと思います。

また、私がスポーツの世界の魅力を知ったのは1964年の東京オリンピックです。それまで野球しか知らなかった少年にとって、どれだけインパクトがあったか。私は、日本が金メダルを幾つも取ったからスポーツに魅力を感じたわけではなく、スポーツそのものに魅力を感じました。ここがすごく大事なことです。これはオリンピック精神の中にあるエクセレンス（Excellence）です。

少し厳しく、失礼なことを言います。柔道は金メダルを取って喜んでいましたが、私は、見ていてあまり面白くありませんでした。素人からすれば、試合が何をやっているか分からないからです。やはり、柔道の魅力をもっと伝えてほしいです。

実は、ソフトボールもそうでした。ソフトボールは金メダルを取りましたが、ソフトボール人口はそれほど増えませんでした。それはなぜかという、ソフトボールの魅力を伝えなかったからです。

ここが一番大事なことです。スポーツのエクセレンスをどれだけ伝えることができるか。メダルを取ったら競技人口が増えるとか、勝ったら競技人口が増えるというのは、一時的な幻想でしかありません。

ですから、スポーツの魅力を伝えないとはいけません。メダルを取ることで、逆に、そのスポーツの魅力が見えなくなっているところがあります。メダルをたくさん取ったから、そのスポーツがすごいのではなく、そのスポーツのプレー・パフォーマンスがすごいという評価の仕方を広めていかなければいけません。少し口幅ったいことを言いましたが、そういう気がします。

次に、野口さんからは、女性のエンパワーメントのツールとしてスポーツが活用されるという話がありました。私も、まさしくそうだと思います。スポーツは社会を映す鏡だと言われるので、そのスポーツを通して社会の問題を解決していくのは、すごく大事なことだと思います。

ただ、危険性があります。それは何かというと、そこには文化が存在しているということです。その国や民族の文化を反映しないスポーツの問題性はありません。

例えば、私が研究していたフリーガンで言うと、イタリアとイギリスとスペインのフリーガンには違いがあります。イギリスのフリーガンの背景には階級社会があります。イタリアのフリーガンの背景には南北問題があります。スペインのフリーガンの背景には民族問題があります。

このように、それぞれが持っている社会的な背景が違うので、一足飛びに女性の問題として片付けるのはどうなのかという思いがあります。スポーツをエンパワーメントの社会問題の解決のツールとするのはもちろんいいのですが、そこにある危険性も少し考えていただければと思います。

最後に、山口理恵子さんの話は、海外の女性スポーツの状況がよく分かりましたし、すごく面白いと思いましたが、言いたかったことは、やはり教育ではないかと思えます。女性スポーツをどう教育するか、その価値をどのように伝えるかというところでは、学校教育は重要な役割を持っています。学校体育は、私たちのスポーツ観や体育に対する考え方を固定化する大きな役割を果たしていますので、その辺で考えてもらいたいと思います。

また、スポーツで何かを教育できるということは、逆に、そこに政治的な意図が入り込む危険性があります。例えば、私たちの年代は、高度経済成長のときに体育の教育を受けてきましたから、体力主義と技術主義に席卷されていました。そこでは、「スポーツは、努力すれば必ず成功する」という東京オリンピック以後のカリキュラムの中でやっていたので、成績や業績が重んじられ、楽しむことは全然ありませんでした。スポーツ文化を自分の生活の中でどう採り込むかという生涯スポーツの考え方も全くないところで行われていました。ですから、私たちの年代は、体育嫌いがすごく増えて、大人になっても体力不足が問題となっています。

さらに、2020年に向けてスポーツの価値をもう一度考える必要があります。例えば、リオオリンピックの女子5000メートルで2人が転んで、助け合いながらゴールしたシーンは、オリンピック精神のフレンドシップ（Friendship）から、感銘を与えました。

女性スポーツは、今、スポーツ界が持っているさまざまな問題性を明らかにし、なおかつそれを解決する糸口を示す大きな力を持っています。ドーピングを告発したのも女性です。女性スポーツは、そういう正義感というか、正常化する力を持っていると思います。

2年前に、カーリングの小笠原（歩）さんと今回メダルを取った重量挙げの三宅（宏実）さんと一緒に、女性スポーツについてのシンポジウムをしましたが、そのときに感じたのは、女性スポーツはきちんとフェアプレーをしているということです。小笠原さんも、カーリング精神にのっとり、ファールは自己申告するというフェアプレーを重視しています。女子サッカーも、服を引っ張ったり、審判の目の届かない所で何か悪いことをすることはほとんどありません。

私たちは、なぜスポーツという文化をこの世の中に生み出したのか。私は、スポーツの世界に理想の社会をつくりたかったのだと思います。しかし、今、そのスポーツが描く理想の社会が崩れつつあります。ビジネスやエンターテインメントなどの俗世界がスポーツの世界を侵食し始めているからです。

ですから、スポーツの持っている理想性を担保しながら、女性も男性も関係なく、スポーツ全体の社会をもう一度見直して、さまざまな問題を考えていければ、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに対して社会学からインパクトのある提案ができるのではないかと思います。

そういうことで、4名の方の発表に敬意を表し、私のコメントに代えさせていただきます。ありがとうございました。

【清水】 急がせてすみません。

あと5分ほどありますので、フロアでどなたか発言したい人がおられればお願いします。よろしいですか。それでは、シンポジストに最後に一言ずつ、1分ぐらいで発言をよろしいですか。内田さんからお願いします。

【内田】 皆さん、聞いていただいてありがとうございました。

女性らしさの問題がありました。障害者スポーツでは、障害者らしさみたいな、おかしな差別観があ

ります。今回のロシアのドーピングで、パラリンピックではロシア選手が全部締め出されることになりました。あのとき、「障害者なのにドーピングするんだ」というコメントが結構たくさんありました。障害があってもなくても、アスリートだから勝ちたいのでドーピングします。もちろんやってはいけないことですが。この「障害者なのに」というコメントには、障害者らしさみたいなものがどこかにあります。これが私が今日話したかった問題に直結してくると思っているところです。

オリンピック・パラリンピックを契機に、これから私自身もさまざまな活動をしていきたいと思っていますので、ぜひ、皆さんにご協力いただけたらと思います。まとまりませんが、どうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。

【山口香】 私自身も、先生方のいろいろな話を聞いて、とても勉強になりました。

一つ思うことは、オリンピック・パラリンピックに出るアスリートたち、今、実際に活躍しているアスリートたちの外側でいろいろなことが議論されていますが、本当は、その人たちがどういう思いで金メダルを目指しているのかとか、戦っているのかという声をもっと拾い上げられたらいいということです。彼らがいろいろな所に出てきて発言をすることで問いかけるものが、もっとあっていいと感じています。こういった場にもアスリートたちがどんどん出てきて発言できるように、そういう機会をつくっていただければ、すごくありがたいと思いました。

【野口】 今日はどうもありがとうございました。発表が不慣れで、少しお聞き苦しいところもあったかと思えます。申し訳ありません。

自分がザンビアで経験してきたことやスポーツの可能性について皆さんと共有できて良かったと思っています。ご指摘のとおり、開発とスポーツというのは難しいところもあると思いますので、今後、私自身も勉強していきたいと思っています。よろしくお願いします。

【山口理】 長時間にわたってありがとうございました。

先ほどの杉本先生のご指摘を受けて、スポーツのエクセレンスをどう伝えていくか。特に解説が面白いと、そのスポーツがすごく面白くなります。ですので、先ほど山口香さんが言われたように、アスリートのキャリア教育の中で、きちんと言語化できるアスリートを育てていくことは、解説者をする際にも、そのスポーツのエクセレンスを伝えていけるアスリートを育てることにつながるかもしれません。非常に示唆的な問題提起をいただいたと思います。ありがとうございました。

【清水】 どうもありがとうございました。

最後に、シンポジストとディスカッサントにもう1回拍手をお願いします。

それでは終了します。ありがとうございました。

(終了)